

リコー三愛グループ
三愛会会誌

1991 No.104

リコー
三愛
三愛石油
リコーエレメックス
日本リース
北九州コカ・コーラボトリング
三愛不動産



特集 つくる

創業社長 市村清物語

母校北茂安小学校に

市村清コーナー誕生

昭和三十三年四月二十九日、市村清創業社長の母校である佐賀県三養基郡北茂安町立小学校において、講堂の落成式が盛大に挙行されました。当時としてはユニークなかまぼこ型の屋根の講堂は市村清社長が寄贈されたもので、式典には社長夫妻のにこやかな顔も見られました。

故郷を愛してやまなかった社長は、故郷のために何かをしたいという思いをいつも抱いていたと言われ、『市村講堂』の寄贈もその思いを形に表したものであったと言えましょう。『茨と虹と―市村清の生涯』には、次のように記されています。

「市村にとってふるさととは、ただ漫然と少年期の夢を育んだ揺籃の地ではなかったはずである。寒風に吹きさらされて蓮根を掘る父の姿、借金に追われながら小さな田畑を耕す母の苦勞、そして彼自身にも、丹精こめた子牛を奪い去られたときの口惜しさや、進学を

途中で諦めなければならなかった悔念など、いまわしい苦難の思い出がそこには満ちていた。彼の人生の前半は貧乏と因襲に閉ざされた環境への抵抗と、そこから脱却するための戦いであったともいえるのである。しかしながら、人にとって所詮故郷は一つしかない。

そのなりわいがいかに苦難に満ちたものであったとしても、佐賀は彼にとって、血肉も言葉もその運命さえも与えてくれた母の国であった。夕日に浮かぶ背振山地の稜線や、滔々と流れる筑後の川筋や、風光る佐賀平野の野づらは、歳月の厚みを越えて、いつも彼の心によみがえる懐かしい風景であった。

戦後も十幾年も過ぎた頃、すでに六十の坂にかかろうとしていた市村の心に、おれも故郷のためになにかしてやらねばならんな、という感慨が湧くようになっていたのはごく自然な人間感情というものであろう。……」

「来年は私の祖父の新太郎が亡くなってちょうど五十年忌になる。その記念に村にな



新講堂の入口

講堂入口の「市村清コーナー」

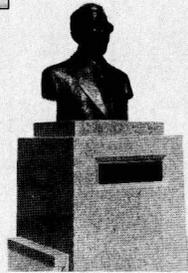




昭和33年に完成した『市村講堂』



祝賀会で挨拶する市村社長



講堂正面にある「市村清氏之像」



講堂に立つ市村社長と幸恵夫人

にか一つ寄付させてもらいたいが、なにがいかね。なるべく若い人たちのためになるものがいいと思います。』

市村の突然の申し出に村人たちは大喜びで、さっそく有力者たちが集まって相談した。最初は村の中学校に講堂を建ててもらおうという意見が強かったが、結局村の小学校に変更され、そこに建設されたのが現在北茂安小学校にある『市村講堂』である。

この講堂は翌年の四月に完成し、祖父の法要で帰省した市村夫妻を迎えて二十九日天皇誕生日の佳日に盛大な落成式を挙行、つづいて村をあげての賑やかな祝賀会が催された。小学校の南運動場には各部落別の仮舞台が五基もたてられ、舞踊、歌謡曲、漫才、それにこの地方特有の『にわか』（群衆舞踊）などの出しものが次々に演じられて終日のにぎわいであった。列席した来賓は鍋島直紹知事、代議士三池信をはじめ久留米市の名士や近況の町村長、議長など多数で、市村は五つの舞台にいちいち上がって佐賀弁であいさつし、そのたびに万雷の拍手と歓声に包まれた。

それから三十余年の月日が流れて、市村講堂も老朽化が進み、また手狭にもなってきたため、市村家の了解を得て建て替えられることとなりました。

新講堂完成真近となったある日、市村茂人三愛不動産会長のもとに北茂安町長が訪れられた。「講堂は新しくなって、寄贈された建物はなくなってしまうけれど、先生から受けたご恩を忘れないため、また先生の偉大な業績を後世まで残すために、ぜひ先生のコーナーを設けたいので協力をお願いしたい」というのが訪問の用件でした。

そこで、三愛会、リコー、三愛不動産等が協力してディスプレイを担当し、この度、講堂入口に『北茂安が生んだ大先輩市村清』と題された展示コーナーが完成したのです。子供たちに市村清の業績をわかりやすく伝えたいとの思いから、『マンガで描く市村清の生涯』（三愛会誌102号から抜粋）も展示されています。

落成式は平成三年五月二十七日。六月十日にはこけら落としの音楽会が催されました。「市村創業社長は弱者に対して人一倍思いやりが深く、いつも励ましつづけている人でした。貧農の子から身をおこし、実業家として成功をおさめた市村清の生き方が、少しでも子供たちの教育に役立ち、励みになってくれたら、創業社長にとってもこの上ない喜びとなるでしょう」。市村茂人会長はこう語っておられました。